

新京での敗戦

— 引揚げまでの一年 —

東京都 酒入 郁子

昭和五十（一九七五）年の秋、当時三十九歳、ドイツに住んでいた大連生まれの娘が、友人から送られてきた『暮らしの手帖』の記事で、「二龍山開拓団の終末」を読み、心うたれて、父に「記録の大切さを思い、今、私の記憶の中にある断片的なシーンについても、いつ、どのような状況の下で起こったことなのかを切に知りたく、教えて頂きたいと思います」と手紙を書いた。父は、それに応えて早速ペンを取り、娘に書き送った。

その私の父、北章は平成三（一九九一）年に八十五歳で亡くなり、今年で十三回忌を迎える。父の遺稿を引きつつ、昭和二十年、終戦直前に大連から新京（長春）に移り、通化への疎開の途次、吉林で終戦を迎えた私たち一家の、引揚げまでの

は漸次本土に迫り、敗戦の様相日々濃厚となり、いよいよ最後のときの近づいたのを感じ、親子一緒にいるのが最善と判断したために、私たちは父を迎えられたのであった。

八月九日の夜には、ソ連機により新京の街へ爆弾が投下された。この時点でソ連の参戦は明らかとなり、会社は家族の日本への引揚げを決定しそのルートは朝鮮經由日本へとということになった。しかし、父は満州における関東軍の兵力、新京西方六百キロメートルの白城子に迫っているというソ連軍の戦車などのことを考えて、家族のみを朝鮮へやることをせず、最後まで親子六人一緒にいる方を選ぶということに、母と話し合って決めたことだった。

十日、十一日と、引揚家族の列車手配などで多忙なときを過ごしていた父のもとに、十一日夜、召集の赤紙がきた。新京の在郷軍人全員にきたのだという。父は、昭和八年に、姫路歩兵第三十九連隊に幹部候補生として入営しており、陸軍歩兵

一年余りの生活を記し、外地にあつて祖国が戦いに敗れるということはどういうことであつたのかを、改めて考えてみたいと思う。

父は、明治四十（一九〇七）年生まれ、大学を卒業すると同時に、大連に本社のある国際運輸株式会社に入社した。本社の移転に伴い、一年前から単身赴任していた父が迎えに来て、私たち家族が新京へ旅立つたのは昭和二十年七月二十五日、四人の子供のうちの上の二人、国民学校三年の私と、一年だった妹の夏休みを待つてのことであつた。この引越しは、私たち子供にとつては、ヤマトホテルの一泊も特急アジア号の展望車も、それは久しぶりに父と母のそろつた楽しい家族旅行であつた。しかし、新京民康路の家に着いたときのことを、父は次のように記している。「辺りは既に薄暮、家の屋根を斜めに横切るように、流れ星が流れた。今までに見たこともないほど大きく、まるで火の矢のようで、何とも言えず不吉な気がしたが、口には出さなかつた。」と父が、敵の侵攻

少尉の辞令を受け取つていた。召集令状には「明日十二日午前十時、西広場に集合すべし」とあり、なお注がついていて「二食分の弁当と二日分の白米を持ち、家族と永別して集まること」と示されていた。このとき母は「子供の命は私に預けて下さい。そして、その白鞘の短刀を下さい」と父に言った。それに対して「万感の思いを込めて妻に手渡す」と父は書いている。

しかし翌日、父たちは「首都新京は軍の手で守ることになった」として、帰されることになる。西広場では家族を始末してきたという一将校が抜刀し「あの司令官を血祭りにあげて、ここに集まつた者で新京を守るう」といきり立つなどのこともあつたという。この時期、関東軍も一夜にして命令を撤回するなど、相当に混乱した状態にあつたことが伺われる。しかし、そのお陰で私たちは父を失わずにすんだのだった。

十三日夕刻、民間としては最後に新京を出発する列車（満鉄営業局次長片桐氏の名をとつて片桐

列車といったこと)で、本社機関は吉林を通じて通化に移ることになり、これにわずかながら残っている家族も同行することになった。昼過ぎに帰宅した父は、二、三時間で旅支度をするのだと言った。母は弁当を作り荷物をまとめ、子供たちにはそれぞれ晴着をリュックサックに詰めて背負わせた。父は軍服と軍刀を持ち、軍靴を穿いた。かくて新京駅へ向かう。道すがら、何度か兵隊を満載したトラックに会い、その度に兵隊たちは「我々が来たからもう大丈夫。元気で帰ってこいよ！」と口々に叫んでいた。新京駅について出発直前に牡丹江支店の社員家族約三百人が、ハルビン經由新京駅に到着した。この家族たちは、本社のある新京へと必死の思いでたどり着いたのであるが、その本社機関はまさに新京を離れようとしており、しかも、朝鮮方面への列車は既に打ち切られている。そこで父たちは、牡丹江組の車両を片桐列車の後尾に連結して、通化へ向かうことにした。

翌十四日、吉林に到着、通化行きの列車を待つ間、一行三百余人は名前は忘れたが、ちよつとした門構えの料亭に落ち着くことになりここで一夜を明かした。翌十五日正午、天皇陛下の重大放送があった。父は吉林支店で聞いていたというが「戦争は終わったのだ。負けたのだ。思わず無念の涙が流れた。反面、これであるいは生きて内地へ帰れるかもしれないという、ほつとした気持ちにもなった」と書いている。宿舎では、下を向いて歯を食いしばる人、こぶしで涙をぬぐう人、さまざまだったが、母は正座し手を膝に置き、うつむいて泣いていた。何が起こったというのか、母に聞いてはいけないうような気がして、私は青年隊のお兄さんに「教えて」とせがんだ。答えは「無条件降伏」だった。聞いたこともない言葉だったが、何かとてつもないことが起こったのだということ、はつきりと分かった。

吉林と新京の間で毎日電話による連絡がとられ、八月二十日ごろ、本社は新京への引揚げを決定し

たという。但し家族については、まだソ連軍の進駐のない吉林にとどめることになり、その際、三百余人の保護のため本社の幹部一人を責任者として残すことになった。このときまたまた妹の節子が高熱を出していたので、父は自ら希望してこの任に当たることになった。その後、ソ連軍の吉林入城があり、父は預かっている社員の奥さんたちを、ソ連兵の襲撃から守ることに腐心したという。また「新京と吉林の治安状況を考え合わせながら、出発の日時を決定することが自分の最後の重大な仕事だ」という決意を固めてもいたという。

八月末、いよいよ明日出発と決め、父は新京本社や関係先に連絡していたが、このとき、節子の熱はまだ下がっていないかった。しかし、父が「後に残るか」と言うと、母は、「いいえ、一緒に帰りましょう」と答えた。この前、本社機関が新京に帰るときは、「残りましょう」と言った母が、今回は熱のある子を連れてでも、一緒に帰ろうと言う。これは、母の一種の靈感とでもいべきものであ

ったか。後で分かったことだが、私たちが吉林を発った翌日、滞在していた料亭はソ連兵に襲われたとのことだった。出発は早朝とし、なるべく一団となり、前後左右を吉林支店の青年隊に警護されながら、一気に満鉄吉林鉄道局に入る。座席のカバーはむしり取られ、中身の藁が床に散乱した客車に乗り込んだ。

駅ごとに満人の群衆に窓をたたかれ、入り口の扉が外から押されて内側へたわむのを、青年隊員が押し返すなどしながらも、夕刻無事新京駅にたどり着く。夜間外出禁止まで約一時間、ここからは、迎えに来てくれた新京支店の青年隊員にせき立てられかつ守られながら、一同駆け足で駅から四、五百メートルの新京支店に入り、その夜は事務所の二階の床に家族一塊ひとかたまりになって休む。翌日、牡丹江組の家族たちは街の小学校に、民康路の家をソ連軍に接収されていた私たちは、知人の竹川一家の住む安達街の社宅二階の八畳一間に落ち着いた。父は、それまでずっと持ってきた軍刀も、

ついにこのとき事務所に置いてきたのだった。

ソ連軍占領下の長春で、日本人は全員、胸に「日僑俘」と書いた布切れを縫いつけて外出するように指示された。このころの出来事として、新京支店の営業課長が妻子共々夜間何者かに皆殺しにされたとか、元撫順支店長が押し込み強盗のソ連兵に射殺されるというようなことがあった。しかし、この時期に新京在住の十数万の日本人が大惨事に見舞われることはなかった。終戦と同時に蒋介石総統が中国国民にラジオで「暴に報ゆるに暴を以てせず」と呼びかけたおかげだと父は言っていた。また二龍山など各所の開拓団の人たちが悲惨な目に遭ったのに比べ、十万、二十万と日本人の集まっていたハルビン、新京、奉天（瀋陽）、大連で無事に過ごせたのは、やはり数の力、集団の力だと思ふもある。しかし、氷点下三十度の新京の冬は確実に迫っていた。家財は大部分、大連から新京への貨物列車に積まれたまま終戦となり、手荷物で送った物も民康路の家に残したままの私たちに

みが泊まることになった。しかし、これで心強いと思つたのも束の間、牡丹江からの青年隊が一斉に発疹チフスにかかってしまった。社宅の者は皆不安のうちに日を送っていた。高熱を出しているのに医者もいなければ薬もない、このまま死なせては親御さんに申しわけないと、父は知り合いの医者事情を話して診てくれるよう頼んだ。その医者は「薬らしいものもないが、とにかく診てあげましょう」と引き受けてくれた。有り難く、感謝の言葉もないと父が言っていたのを覚えている。大部屋には、三十人が寝ていて熱のため唸っており、悪臭が充満していたという。その中を、医者はずボンをまくり上げ患者の間を抜き足差し足で歩いて、患者の額に手を触れるだけだったが父も、恐る恐る同じようにその後を歩いて歩いたそうだった。このころ、接収された民康路の課長公館の寮母だった人もここに来ていて、この親切な小母さんが毎日お粥を炊いてみんなに食べさせてくれた。患者は何日も苦しんでいたが、若い生命力と言うか

は、防寒用のシュールバ（毛皮の外套）はおろか、夏服さえ、家を出るとき着ていたものと少しの着替えの他は、父の言う「晴着」が一着ずつあるだけだった。母は、社宅の竹川さんから着物と綿を分けてもらい、その着物をといて親子六人分の綿入れの上着、ズボン、帽子を作ることにした。

このとき私たちの住まいとなった安達街の社宅は、北東の角に二階建ての課長用社宅一棟、北西にやはり二階建ての女子独身寮、中庭をはさんで南側に、平屋連棟式の一般社宅がコの字型に建っていた。社宅全体が、今の言葉で言えば一つの団地であつて、幅百メートルの安達街通りに面してその西側にあり、道を隔てた東側には日本生命ビル、百メートルほど西側には南北に鉄道線路が走っていた。

社宅の窓やドアは、一部の出入口を除いて板が打ち付けられ、女子寮の人たちは皆髪を切って男装していた。そのうち牡丹江から男子青年隊員が到着し、女子は全員二階に移って、一階は男子の

天の恵みともいうべきか、ついに一人の死者も出さず全員全快、社宅の方へ伝染することなく、発疹チフスは終結した。しかし、一つのとても悲しい出来事があつた。それは、彼等を看病してくれたこの小母さん自身が感染して亡くなったことだった。遺体は、みんなの手で郊外に手厚く埋葬された。

そのころのある日、父はソ連占領軍事司令部に呼び出され、満州における小運送について、論文を書くように命じられた。大豆と小麦の穀倉といわれた広大な満州の、生産と鉄道輸送については満鉄に資料があるが、生産地から鉄道沿線までの輸送についての資料がない。これは満州特有の馬車によるもので、全満の馬車輸送を担っていたのが国際運輸であつたところから、文書課長であつた父にそれを明らかにせよというのであつた。書いたものをどうするかと、父は聞き「モスクワの図書館に収める」と言われたそうだった。翌日から約半月、父は毎日司令部に通つて「満州の小運送」

をまとめた。この司令部通いの間だけは証明書をくれていたで、そのころ頻発していた日本人男子の拉致の危険からは免れた。しかし、その他のときは、よく下の妹の道子をおぶって外出していた。子供連れではソ連兵も手出しはできない、というのが父の考えだった。確かにそれは効果があったようだったが、このころ父は過労から黄疸になった。

十月半ばになり、冷たい風に街路樹のポプラが一夜ですべての葉を落とすころ、母は家族全員の防寒用の綿入れを完成した。そして次にまた、他のだれも思いつかないようなことを始めた。母は竹川さんの机の引き出しを一つ借りて、それにあんパンや味付けパンを盛り、首から掛けて人通りの多い道に立って売ってくるという。一般の社員の奥さん達は、皆衣類を売って日々の生活をしている。しかし、我々には売るべき一枚の衣類もない。持ち金もほとんど底をついていた。しかもそのころ、父は黄疸の後で健康が充分ではなかった。

けば「新京時代の僕は、親から離れたら一卷の終わりだと思っていた」とのこと。そうであれば、彼の「行つてらっしゃーい！」は「必ず帰ってきて」という必死の叫びであったのだと思う。父母の留守の間、私は炊事係だった。裏の線路を汽車が通るとき、日本人の機関手が落としてくれるコークスを拾い、そのコークスで高粱のおかゆを炊いた。弟妹たちに食べさせるのは私というような気負いを今も思い出す。しかし、気持はあっても体力も智恵も足りない。出来たおかゆを運ぶには、お腹にお釜を押しつけて支えるしかなく、着た切り雀の私の、白地に水色の花柄のスカートは、いつか煤で真っ黒になり悲しかった。

寒さが厳しくなると、押入の壁は一面凍ってきらきら輝いた。大連生まれの私たちには、二重窓のガラスに毎朝表れるシュロやその他さまざまな植物模様はおなじみのものだったが、暖房のない部屋のこの氷に模様はなかった。でも私たちはこれをおとぎ話の美しい氷のお城に見立てて遊んで

そこで母は一人で考え、思い切つてそれを実行したのだ。初めてパンの箱を首から吊つて家を出るとき、社宅の細君たちの哀れむがごとき目とささやきの中、母は何ら悪びれた風もなく、背筋を伸ばしむしろ笑顔さえ見せていた。その後ろ姿を見送つて「母は強し、母なればこそ」と手を合わせた気持ちだった。四人の子供を、来るべき厳冬の寒さから守り、飢えから守ろうとする姿だった。

父は、母のこの着想と実行をもとに、この仕事をもって越冬の手段とすることに決めた。そのころ、安達街大通りにマーケットができていたので、そこに間口奥行各一間の店を借りた。早朝に仕入れてきたパンをケースに並べ、父と母が交代で店番をした。このマーケットには、俠気のある五十年輩の満人のボスがいて、陰に陽に助けてくれたそう。また、両親が家を出るとき弟の精一はいつも大きな声で「行つてらっしゃーい」と何度も叫んで手を振っていたが、三十年後の述懐を聞

いた。しかしこのときの父や母には、それを美しいと見るゆとりなどなかったに違いない。パンの仕入れの朝早く、ソ連兵が「マダム」と呼びかけながら近づいてきて、背筋の凍る思いがしたことや、水汲みからの帰りにその日の売上金すべてを奪われたことなどを、父は淡々と記している。冬の水汲みは、つるべからの滴水水が井桁の周囲に凍り付いて高くなり、危険な仕事であったという。しかし、それは父にしかできない仕事であったから、父は毎日玄関で母に財布を渡すと、すぐバケツを持って出かけた。夕暮れ近く、気がせいいたためであったか、この日に限つて売上金を持つたまま出掛け、そしてすべてを奪われたのだ。いつか正月も過ぎ、やがてソ連軍撤退の日がきた。そしてその後中国の軍隊が入ってきた。蒋介石の中央軍で、アメリカの装備を持った軍隊だった。国共合作で共同戦線を張っていた国民党と共産党は、日本の降伏と同時に再び袂を分かち、両者相戦う内戦が始まっていた。長春では最初に

入城した中央軍を共産党の八路軍（パード）が攻めて追い払い、ついで中央軍がまたパードを追い払うという攻防戦が始まった。

四月、何回目かの長春攻防戦が始まるという風評がもつぱらだった。このときは中央軍が街におり、八路軍が裏の鉄道線路のほうから攻めてくるという。そのような状況の中で、十四日午後、母は男の子を出産した。夜、うわさ通り八路軍は鉄道線路を横切って、独身寮のほうから社宅に入ってきた。母と生まれたばかりの弟の寝ている私たちの部屋の、ふすまを隔てた隣室の窓に、彼等は日本生命ビルに向けて軽機関銃を据えた。幸いその晩、銃撃戦が始まることはなかったが、次の朝、中央軍が、退却に際し日本生命ビルから撃ってきた軽機関銃の弾の一つが、母と弟の布団の上に着た。

そしてその朝、父が八路軍に連れ去られた。家を出るとき、父は廊下から部屋の中を見せ、「タイタイ(妻)がユーピン(病気)だ」と説明して、そ

申し出た。パードの少年兵は、これが多分指揮者だろうが、朝私を連れてきた兵に妻の病気を確認して「帰ってよい、ご苦労だった」と許可してくれたときは、実に嬉しかった。いざ帰ろうとする時、「ちよつと待て。まだ少し明るいから迫撃砲が飛んでくるかもわからない。兵を二人案内させる」と言う。ああは言ったが、後ろからズドンと一発やられるのではないかという気持ちが一瞬浮かんだ。民家の間を縫って三百メートルくらいきた所で、「もう弾の飛んでくる心配はないから、一人で無事に帰れよ」と言ってくれた。大喜び大急ぎで、妻子の待つ安達街の家に帰り着いた』と父は記している。この一日はしかし私にとってなんと恐ろしく長かったことか。母にとっても、自身が健康で、子供たちの生命は自分が預かるという気概を持って、父に白鞘の短刀を所望したときとは状況が全く違っていた。母は、まさかのときの身の処し方を、弟妹たちのことを含め私に伝えた。十歳の私を信じ、死の覚悟さえ求めたそのとき三十一

れからパードの兵隊に従って出て行った。「彼等は十五、六人の分隊で皆少年兵のような若者、だが隊長でどれが兵か分からない。この分隊は第一線部隊で、市街戦でははしごを持ち運び、二階建ての建物にそれを掛けて上がり、そこから射撃するので、そのはしごを私ともう一人の日本人で運べという。側面からヒューヒューと射撃を受け、少年兵が早く早くとせき立てる中、戦争の終わつた今、ここで死んでたまるかと側溝に伏せる」などしながら軍夫として働いたという。『昼になると、敵味方とも一歩退いて昼食だ。家屋の陰で隊長も兵も我々軍夫も皆一緒の食事だ。ここらがパードのいいところかもしれない。このときの豚汁は、何とも言えないほど良かった。夕方になると一時休戦。双方少し退いて、お互い食事をし睡眠をとるのだ。日本人のような夜襲などケチな戦はしない。なにせ大陸の兵隊だから。そこで、宿舎(三百メートルばかり後方の民家)に入ったとき、思い切って「妻が病気だから帰してくれ」と

歳の母の心が、今の私にはかなしくも愛とおしい。その日がどのように過ぎていったのか、母の布団の横に座り、じつと話を聞いていたということ、そして、そのときの体のふるえる感覚―信頼された誇りだったのか、あるいは怖れだったのか、それ以外は何も覚えていない。

その後、内戦の繰り返しで商売も難しくなり、母の出産もあって、生活は極度に逼迫したこと、そのとき、善き隣人たちからいろいろ世話になったことを父はその一人一人について「覚えていますか」と私に問いかけていた。竹川さん、笹川さん、後藤さん、種岡さん、小菅さん…。小父様、小母様、お姉ちゃん、お兄ちゃん、もちろん私にとっても大好きな方々なのでよく覚えている。しかしその方々の助けがなかったら、私たちは生きていられなかったかもしれないなどは、思ってみたこともなかった。ただこのような状況の下で、私の心に初めて、世の中にはいろいろな人がいるのだという現実が映るようになったのは確かだっ

た。子供だから分かるまいと悔って父母のことをうわさする人もいたし、あからさまに私たちの貧しさをあざける人もいた。

昭和二十一年七月二十六日、内地への引揚げの日がきた。その前から高熱を出して病床にあった母は、まだ一人歩きできる状態ではなかったが、この機会を逃すことはつらく、またこの地に残ることの危険も考え、さらに知り合いの医者が「私もこの集団で帰りますから、一緒に帰りましょう」と力強く言ってくれたこともあって父は皆と一緒に帰ることを決意したという。父が大きいリュックサックを二つ、上の子供三人が小さいリュックサックを一つずつ背負った。私には、弟のおむつが詰まっていた。母は衰弱が激しくて、弟を背負うことができず、お腹に帯でくくりつけていた。二歳八カ月の妹道子は、私を手を取り、七歳の節子と五歳の精一も手をつないだ。こうしてやっと、最後に私たち家族が家を出ようとすると、父の靴がない。私たちの出るのを待ち構えて、玄関にま

になり、各自は弁当のみを持つ。真夏の旅行で、弁当が腐敗しないようにするには、炊いたまま鍋ごと持つのが最上とのことで、我々もそれに倣った。ところが、持ち物検査のどさくさの間に、なんとることか、命の綱の米飯を鍋ごと盗まれた。先の靴は満人のかっぱらいだが、この鍋盗人は同じ日本人、しかも同じ引揚者なのだ。この期に及んで、病人と子供の一家から、その日の命の糧ともいべき食料を盗むとは、全く憎んでも余りある輩だ。暑い日盛りを、一行五、六百人と共に、親子七人励まし合いながら二キロメートルの道を南新京駅に向かう。そこには、平板の無蓋車が用意されていた。一車両ごとに五、六十人ずつ、まず男たちで周囲に棒を立て、それを縄で結ぶ。一方の端に共同の高梁袋を積み、隅に便所代わりの四斗樽を置く。ついで、全員のリュックサックを中央部に積み上げる。子供は内側でそのリュックサックにもたれかかり、大人は子供たちをガードして外側に座る。こうして全員乗り込み、第一の

で入り込んでいた満人のだれかが盗んだに違いなかった。父は、裏の青年隊に配給された地下足袋の、なぜか一足でなく片方ずつ残っていたものを履き、私たちは集合場所へ急いだ。

私の記憶はここでとぎれ、この後まっすぐ無蓋列車につながる。動いているかと思うと突然駅舎も何もない原っぱに止まる。そして何か不思議な、大人たちの切羽詰まった声や振る舞いがあり、何かが話し合われ何かが行われ、そして列車はゴトンと動き出す。私たちがどのようにしてこの風変わりな乗り物に乗り込んだのか、二歳だった妹がぐずりはしなかったか、赤ん坊だった弟が泣きはしなかったか、何も覚えていない。集合場所からのいきさつを父は次のように書いている。「焼けつく猛暑の中、集合場所で持ち物の検査を受ける。貴金属は厳禁ということで、妻はそれまで持っていたアレクサンダーとルビーの指輪を、ここで地面に埋めた。それに先立ち、食料は高梁のみ持参を許されたので、これは一括貨車に積み込むこと

收容所奉天に向かつて三百キロメートルの途を発車する。ときは正午、真夏の太陽は容赦なく頭上に照りつける。病後の妻と生後三カ月の哲二の健康を案じる我らに乗せて、列車は大陸の荒野を横切って徐々に進む。」

そのあとは、列車が急に止まり金になるようなものの要求があり、そのようなものは持ち帰り厳禁のはずだが、それでも各車両から少しずつ金品が集められ、それが機関手の所に届くと動き出すということの繰り返しだったと記憶している。列車の止まっているとき暴徒に襲われたら、と思うと背筋が寒くなるという言葉のはみんなの実感であった。そのうちに、夕食の時間になり「子供さんにあげて下さい」と、おむすびをくれた人がいた。集合場所で米飯を盗まれたのを知っての厚意で有り難いことだった。途中の駅での停車時に、満人がお茶を売りにきた。目玉が飛び出るほどの値段だったというが背には腹は替えられず、皆先を争って買っていた。さらに何回か原っぱで列車は止

まり、あれこれ集めて機関車に持参しては動き出すというのを繰り返し、暗くなってから奉天駅にたどり着いた。

奉天駅から收容所の鉄西地区へ、ここは、もと日本の大工場の集まっていた所。終戦後、ソ連中の機械類を根こそぎ運び去った後の、工場の土間にアンペラを敷いたのが我々の^{ねぐら}の所だ。炊事当番は交代で、高粱飯を炊いたが、当番には父と私が出た。おむつの洗濯も私の仕事だった。母は出産に続く大病と炎天下の強行軍で衰弱していたし、妹節子は栄養失調から夜盲症になっていた。しかし食べるものは高粱のご飯だけで栄養のとりようもなかった。そんなある日のこと、「北さん」と父を呼ぶ声があった。『見れば奉天支社経理課長だった山上君だ。懐かしくも嬉しいこと限りなし。彼は、もうそろそろ我々が南下してくるはずだと、引揚列車が新京から奉天駅に着くたびに、外出の身の危険を構わず行つては名簿を調べ、やつと我々の名前を見つけて、この收容所へ訪ねてきた

その担架を待つことにする。結局薄暗いプラットホームに残ったのは私たち一家七人のみだった。ここで暴民に襲われれば万事休すと覚悟をしたただ神に祈るのみだった。真夜中になって、やつと迎える若者が大八車を引いてきてくれて、早速母、哲二、道子を乗せ、リュックサックも積んでもらって收容所に向った。ここには、以前どこかの独身寮だったと思われる建物の一室が病室として用意されていて、私たちは久しぶりに家族七人が一部屋で過ごすことができた。父も「このことは、妻の療養に大変有り難いことだった」と述懐している。ここでも炊事は共同で高粱飯、しかし鉄西とは違って、昼間には、收容所を囲む鉄条網の外に満人が食べ物を売りにきた。お金はもうほとんど無かったようだが、父は内地に帰ってすぐ役に立つとリュックサックに入れておいた石けんや靴下と交換して、母や私たちに肉や野菜を食べさせしてくれた。

ある日の真夜中に、今から錦泉駅に行つて

という次第。妻も昭和十年に新居を構えたときからの知人だから、お互いその無事を喜び合う。話は尽きなかったが、哲二の食料を明日持参しよう^{と立ち上がり}、私の片ちゃんばの地下足袋を見てその経緯を聞き、「奉天の我々も近く引き揚げることになり、私も新しい靴を買って今ちようど履いてきているから、これを貴君にあげる。私は家に今まで履いていた靴があるから」と言ってくれた。心からその厚意を謝して靴をもらった。さらに翌日には哲二用として粉ミルク、米、すり鉢、すりこぎ、砂糖を持って来てくれる。本当に有り難いことだ。』父も随分と嬉しかったようだ。ここに約一週間いて、次の收容所の錦泉に移動する。このころ、母の衰弱はさらにひどく、收容所から奉天駅までは私が哲二をおぶって歩いた。錦泉の駅に着いたのは、夏の日も暮れて暗くなってからだった。母は、もう一歩も歩けない。收容所からは日本人の若者たちが列車の一行を迎えに来て、病人には担架を持つてくるからとのことだったので、

^{コロトウ}葫蘆島までの列車に乗るとの連絡が入った。幸い母も大分回復していて、哲二をお腹に巻きつけて駅まで歩けるほどになっていた。全員広場に集まって錦泉駅に向かって歩き出したのは、真夜中の二時か三時だった。私たちが子供は眠いのをこらえて歩いたが、前日の大雨で道はぬかるみ、靴が泥の中に吸い込まれるようだった。しかも暗闇の中、お互いに助け合いながらゆつくりと進んだ。父は私が後年にドイツから出した手紙に答えて、「郁子が尋ねた、道子ちゃんをおんぶして夜道を歩いた、あれはいつというのはこのときのことでしょう」と書いている。私はいつのことか分からぬながら、このときのこととはよくよく覚えていて、父に特に尋ねたのだった。背中に妹の道子、眠りながら歩くので、ときどき側溝か何かの穴の中に足を落としてしまう。姿の見えない父母を呼ぶ。背中の道子の名を呼ぶ。泥の中に膝をついてしまう。また立ち上がる。置いてゆかれては大変、取り残されたらおしまい、という不安と恐怖を、引揚後

もよく思い出し、夢を見てはうなされた。ソ連兵が土足で部屋の中に入って来て、父の腕時計をむしり取り、万年筆を奪い、また「日本酒を出せ」と暴れたりした日のことも忘れはしなかったが、この暗闇の中の移動の体験は、思い出すとか忘れるとかいうようなものではなく、心にべったりとはり付いて離れない、そんな恐ろしさだった。

夜が明けて、また無蓋車で葫蘆島へ。そこから埠頭までまたかなり歩いたらしいが、覚えていない。父の文には「埠頭には、日章旗を翻した日本の船が横付けになっている。ああ、あの船に乗りさえすれば日本に帰れるのだ、子供五人全員を連れて。もうリュックサックとの心中はご免だ。放り投げるぞと叫んで、妻になだめられる一幕もあった」とある。眼前に日章旗を見て張り詰めていた気がゆるんだのか、あるいは精も根も尽き果てたということだったのだろうか。

いよいよ船に乗り込む。商船を改造した空母、熊野丸、大きな大きな船だった。何日で佐世保に

着いたのか。「おおい陸だぞー。日本に帰ったぞー」と、大人たちは興奮して叫んだり手を振ったりしていた。しかしその日から上陸まで、私たちはさらに五十日近くを船の中で暮らさなければならなかった。船内にコレラの保菌者がいるという理由だった。佐世保港外には、他にも多数の船が停泊していた。一週間おきの検便とDDTの散布、港内へ、また港外への往復が繰り返された。毎日、小船が船を回って遺体を収容して行った。

このような状態の中、奉天で頂いたお米が弟の命を守った。水に浸したお米をすり鉢ですって布でこし、米粒が完全になくなるまで繰り返し飯盒に入れる。これを船の大釜の熱湯に吊るして重湯にし、少しの砂糖を加えて飲ませたのだった。しかし弟はやせて手も足も細く、声も立てず動きもしない。「人間の赤ちゃん？」「生きているの？」などのささやき声を耳にすることもあり、そのたびに私はその人たちをにらみつけた。そんなとき父は「おおい郁子さん」とか、弟に「ね

え、ガンジーの孫君」などとふざけて見せた。

このころ、船では船員たちが毎晩のように演芸会を開いてくれていた。私はそこで「リンゴの唄」を覚え、昼間は、子供の目には運動場のように広く感じられる上甲板で、父から英語を教えるもらったたりした。

やがて道子が四十度の発熱、一週間ばかりして節子がやはり高熱、その後一週間して九月二十六日、やっと佐世保に上陸できた。上陸のとき、父は節子を背負って両手にリュックサックを持ち、母は哲二をお腹にくくりつけて抱き、私は道子を背負い、精一はビタミン不足によるおできを顔いっばいにつくつて小さなリュックサックを背中に一人で歩くというような状態だった。宿泊所には、父の甥の廉さんが一人で待っていた。佐世保に着いたとき配給されたはがきで帰国を知らせてあったので、父母両方の家から、私とは年の違う従兄弟たちが数人迎えに来てくれたのだが、上陸がいつになるかわからず、一人を残して帰ってい

たのだった。病人は、希望により入院もできるとのことだったが、父はすぐに帰郷することとし、宿泊所に二泊した後、一行八人、父の郷里の鳥取へ向かって出発した。車中では出雲大社へ参拝をしたという人から子供さんと言って、弁当のお握りをもたらしたり、出雲今市駅では、父の高等学校時代の友人で、医者の方本さんが迎えてくれたりした。

米子で境港線に乗り換え、小篠津の父の生家にとどり着いたのが九月二十九日、新京を発って実に二カ月余りの遠く険しい途であった。そこには祖父と父の兄夫婦が待っていて、暖かく迎えてくれた。すぐに重病の節子、道子と乳飲み子の哲二の床を三つ並べ、医者に診察してもらったが、翌日節子は目の縁が黒くなり、耳も遠くなり、枕元にいる父を求めて「お父ちやま」と大声で叫んだりした。二人とも医師の治療を受けていたのだが、道子は、ジフテリアということで、ついに半月後の十月十五日永眠した。二歳と十カ月の短い命で

あった。

道子が逝った日、私は既に父の母校の小学校に転入していた。秋の運動会が間近く、放課後に練習があることになっていたが、授業が終わったところで急に胸が苦しくなり、家に帰らなければという気持ちにはひたすら沸き上がってきた。理由はわからず、その胸の動悸と、家に帰りたい気持ちをしばらく持て余した後、私は「先生に言っておいて」と言うなり、あつけにとられる友を置いて駆け出した。不思議な、生涯にただ一度の経験だった。走れば息が切れる。胸はドキドキする。気がつくとき、それまで一心に口の中で唱えていた「お家に帰らなきゃ」が「道子ちゃん」に変わっていた。いつそうなったのか。それからは「道子ちゃん、道子ちゃん」と泣きながら走った。満州で、夜道しつかりと背中にしがみついていた「道子ちゃん」の体の温もりや大きな目、広いおでこ、少しカールした柔らかい髪、甲のところがぶつくりふくれた小さな手、そしてついこの間布団の中で

だった私も、その年の運動会の徒競走はビリ、それも皆から大きく遅れて走るのがやつと、その後とうとう床に就くようになってしまった。先に発病した母と妹節子に加えて病人が三人になったわけだが、一方で赤ん坊の哲二は、村の牛乳屋さんの牛乳でどんどん元気になり、五歳の精一の顔の吹き出ものもきれいに治った。年末が近づくと、まず私、ついで母が回復し、翌年一月末には節子も全快した。

田舎への引揚げで、お米やみそ・醤油があり、浜からの鯖、畑からの大根、それに牛乳まで手に入った私たちは本当に恵まれていた。私たちの体験など、多くの他の引揚者の御苦労を思えば、取るに足らないものかもしれないと、今、つくづく思う。しかし、私は父が書き残してくれたものから、自分がどれだけ多くの人に助けられて今あるのかを教えられ、そのことから人が不幸なとき、困難に陥っているときに助け合うこと、それも心

目をつぶったまま「パイナップルちょうだい」と訴えていた細い声、そんな一つ一つが一度に思い出されて、私はとうとう声をあげて泣きながら走ったのだった。家に土足で踏み込んで日本酒を出せというソ連兵のことを「オッポーンチュダー」と呼んでいた道子。「おせんべいが焼けました」という遊びが大好きだった道子。おせんべいは手のひらで、はじめは下向き、焼けた順に裏返していく。いくら教えても「おせんべいが、いが、やけました」と言うので困ってしまい、そのうち兄弟みんなで「おせんべいが、いが、やけました」と声をそろえ、繰り返し遊んだ。その「道子ちゃん」が死んでしまった。私が知った初めての愛する者の死だった。

鳥取で、父はまず弟の出生届と、私と妹の小学校転入の手続きをした。校長先生の、学年を一年後らせたらという勧めを断って、父は私たちを二年と四年に入れた。私はすぐ学校に通い始めたが、妹は病気が重く、行くことはできなかった。元氣

を助けることの素晴らしさを教えられた。また、そうするためには心が優しいというだけでは不十分なこと、心の底に強さや潔さを持つていなければならぬことも教えてもらった。父はそのことを直接言っていない。しかし多くの方々からの援助や、母の勇気のある優しさや強さを語ることによって、それを私に気付かせてくれた。

日本人は今、戦争のない平和な生活を享受し満喫しているかに見える。人の助けなど求めず、自らの努力や能力によって、生活を充実させていくことを理想とする価値観も一般的だ。しかし、一方で世界各地の戦争を不安な思いで見守り、自分たちがそれに関わることになるのではないか、戦争に巻き込まれるのではないかという漠然とした不安と恐れを抱いていると思う。このようなときであるからこそ、私は、強さを内に秘めた真の優しさを貴重なものと思う。このようなときであるからこそ、私のささやかな引揚げの記録も、何らかの意味があるのではないかとも思うのである。